

略○中さて住吉には、やうく冬ごもれるまゝ、にいとさびしさまさりて、あらし風ふけば、わが身のうへに浪たちかゝる心ちしてける、おきよりこぎくる舟には、あやしき聲にて、にくさびかけるなど、うたふも、さすがにおかしかりけり。

〔視聽草 九集 九〕御船唄

御代永く

ダシ 御代永く、民も豊に住ければ、ツケいざうちよりて、うたひ酒もり遊ぶもの、ダシ 池のみぎはに鶴とな龜が、あゝつるとな龜が、うたひさへづり舞遊ぶ、三 さえづりなさへづり、うたひうたひさへづりまひ遊ぶ、ダシ ひちくかん竹、なは竹の竹よ、ツケ あゝはちくの竹よ、千々を重て、すゑながく、三 かさねてな、重てな、千々を、ツケ 千々をかさねてすへながく、ダシ 君ハ千代ませ、御代をの松よ、ツケ あゝ御代をの松よ、いつもかわらぬ、若みどり、三 かはらぬな、かはらぬいつも、ツケ いつもかはらぬ、若みどり。

〔秋齋問語〕尾州知多郡邊にて、よめ入の事、富人新しく船をこしらへ、へさきに壻とよめの紋をすへ、是にのせてをくる、さればよめを御新艘ともいふ也、名ごや口堀川へ來る海船に、ふたつ紋付たる多し、古風なる事にや。

〔秋齋問語評〕貞丈云、よめの事をえんざうと言事は、よめの居る家を新に造る故、その新宅をさして新造と言也、尾州の新艘の事は、其所の風俗のみにて、世上へはわたらぬ事なり。

〔精里詩文抄 初集 二〕西峯院得海舟記

西峯院、在府治之北、可眺野而望山、歲二月、余與諸子出而過焉、階前有朽船、身長丈許、其材楠、其腹剝、即今南海漁舸、號全木者、其底斤削痕隱然、院主迎謂余曰、此昨撈池淤所得、先是門外溝斷出泥尺、偶因課園丁浚池、疑其有異、并力拔之、頭尾如敗絮者、隨手剝落、此其餘也、中載羸蟻、欲濯去泥塗、則渙然